



ICT 海外ボランティア会会報

No. 84

2019年1月9日(水)

URL: <https://ictov.jimdo.com> (2017年以降の分)

<http://www.ictov.jp> (2016年以前の分)

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿

“第二の故郷”アルゼンチンへの想い

(株)ぐるなび 副社長

当会顧問 飯塚 久夫氏

◆特別寄稿

徒然日記(2): シニア海外協力隊顛末記(1)

当会特別顧問 石井 孝氏

◆国際交流基金の動き

日本語パートナーズ派遣事業(派遣国:台湾)の募集

事務局

◆海外実践マネジメント

今も継続・拡大する Smart・PLDT プロジェクト(9)

元 PLDT チーフオペレーティングアドバイザー

元 NTT アメリカ社長

現(株)ハイホーCEO 鈴木 武人氏

◆海外グラフィティ

ブルーの誘惑

藤田嗣治のこと

暁の寺(ワット・アルン)

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆海外便り

スペイン・モロッコ俳句紀行(4)

元 JICA シニア海外ボランティア 北垣 勝之氏

◆第38回海外情報談話会開催のご案内

事務局

“第二の故郷” アルゼンチンへの想い

当会顧問
(株) ぐるなび 副社長
飯塚 久夫

本年（2019年）は日本がG20議長国となります。昨年は“わがアルゼンチン”でした。“わが”というのは、もちろん私は日本生まれですが、アルゼンチンは心から“第二の故郷”とと思っているからです。それも趣味の話になって恐縮ですが、NTTに入社したのは大学院を出てから1972年のこと。趣味の“アルゼンチン・タンゴ”は中学時代からですので「仕事45年、趣味55年」と言っています。いや、そんなエコ最良な話よりも、資源に乏しく食糧自給率も低い（38%）日本は、その対極にあり（食糧自給率243%）かつ親日的なアルゼンチンのような国と仲良くしておくことが本当の安全保障と思っているからです。



日本とアルゼンチンとは1898年から交流の歴史があり（茨城県塚町出身のある個人は1853年以来ですが）、昨年は日亜友好通商航海条約締結120周年でした。これは日本が欧米との間で不平等条約を改正できた年より1年早いことでした。去る11月末、G20のため訪亜した安倍総理もマクリ・アルゼンチン大統領と懇談を行い、日亜投資協定署名式、さらに日亜外交関係樹立120周年閉幕式に出席しました。

それに先立って昨年8月、「日本アルゼンチン友好議員連盟」の山本幸三会長、佐藤ゆかり事務局長ら議員の方々の訪亜のお供をさせていただきました。私はアルゼンチンに長期滞在したことはありませんが、趣味の関係で毎年一度は訪れており、それなりに実情を把握してきたつもりです。10年ほど前には総務省主管の「地上波デジタル日本方式」南米普及の仕事のお手伝いでも何回か訪亜しました。NTTグループでNTTコミュニケーションズが提供している全国テレビ中継網（MACOT）デジタル化に従事した経験を活かすことと、その後NECグループ（BIGLOBE）に移ってからはNECテレビ送信機売込みの支援でした。

しかし今回は、滞在中に図らずも、その頃大統領だったクリスティーナ・キルチネルが収賄の疑いで家宅捜査を受けるということがありました。NECブエノスアイレス社の新オフィスに引っ越す時にもわざわざ来てくれた女性大統領だけに、しかもペロン党というペロン大統領（特に有名なのは妻エビータ）の流れをくむ彼女が6兆円もの賄賂を受け取っていたとは！？と、感無量でもありました。貧しい人の味方であるはずのエビータにあやかっていたクリスティーナが何故こういうことになるのか？『ペロン党といっても今や右から左までいろいろあるのだよ』と以前から現地の人には聞いていましたが、今回は、上院議員である故に彼女が有している不逮捕特権（従って家宅捜査も出来ない）を剥奪してまで政府がこうした挙に出たのは、何と実は最近、15年間にわたって賄賂を運んでいた運転手がつけていた克明な運搬記録（ノート）が見つかったからです。

さて、そのテレビのデジタル日本方式は、ほぼ南米諸国に採用されましたが、あれから10年（数年前に当会の本欄に書かせてもらったようなわけで）、今や肝心の（数量が出てカネになる）家庭用機器（特にスマホ）はすべて韓国メーカーに席捲されていまし

た。それだけではありません。かつて（1920年代）、日本初の地下鉄銀座線は、日本より早く地下鉄が通ったブエノスアイレスに学んで出来たのですが、近年（2010年頃まで）は、逆に丸の内線の赤い旧車両をブエノスアイレスに払い下げるほどだったのです。ところが、この10年でブエノスアイレスの地下鉄は中国製の黄色い車両が殆どとなっています。

こうしたことについても（昨今の日本のICT産業低落からしても）忸怩たる思いを抱くばかりですが、話を戻して、戦後まもなく（1961年）、タンゴ界で最も有名だったフランシスコ・カナロというマエストロが来日しました。同時にアルゼンチンのフロンディシ大統領も来日したのですが、当時は天皇陛下が羽田空港まで大統領を迎えに行くほどの日垂関係でした。というのは、古くは日露戦争で日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊に勝てた一因は、アルゼンチンが（日本名）日進、春日という二隻の軍艦を日本に譲ってくれたことにあるのです。下って太平洋戦争後、いち早く日本に食糧援助をしてくれた国がエビータの指示を受けたアルゼンチンでした。さらに1953年、当時の日本では一世を風靡していたと言ってもよい藤沢蘭子というタンゴ歌手が訪亜して絶賛を博したりもして、今日でも年配のタクシー運転手からは日本人とわかると『RANKOは元気か？』と聞かれるほどです。そして1980年頃には、NECを筆頭にアルゼンチン工場から世界への輸出が花開き、米国との貿易摩擦の前線になったりもしました。

ところが、世紀は変わって2001年、アルゼンチンは経済政策の失敗によりデフォルトを起こします。日本企業も引き上げたり、出資を止めたりしました。でも資源と農業生産物にはこと欠かないアルゼンチンのこと、日本が“失われた20年”と言われているのとは対照的に、GDP成長率は数%を維持し、着々と外貨もためて“パリ・クラブ”に溜まっていた負債も返せる状況になっていました。しかしバラマキ政策を続けるクリスティーナ政権（全く積み立てもしていない人に年金を出す政策など）に、アメリカとIMFは（嫌がらせもあるが）返済を認めず、外貨価値も下がって行きました。そして2015年末、為替自由化、輸入規制廃止など自由経済を掲げる現マクリ大統領に代わった途端に、アメリカもIMFもアルゼンチン支持に回り、デフォルト問題も解決し、各国企業はアルゼンチンへの投資を再開しました。クリスティーナ大統領時代には50社に減っていた進出日本企業もこの3年で100社を超える復活ぶりです。

こうして再び復活の兆しが見えた最近、皮肉なことに米国金利上昇の影響を受けて大幅なペソ安に悩まされることになりました。2018年8月に私がアルゼンチンに行った10日間の間に、着いた時は1ペソ約4円だったのが、帰る時は1ペソ約3円（現在も）という状態です。しかしこうした時こそ、かつての日垂関係と上述のような農業・資源大国アルゼンチンという国情に鑑みて、日本はアルゼンチンとの友好関係を高める（取り戻す）べきだと思うのです。日本からの移民（今やその二世、三世）が果たしている役割とその貢献に対するアルゼンチン人の評価も極めて高いものがあります。エビータが戦後、食糧援助を指示したのも、貧しい少女時代に彼女に優しくしてくれたのが日本人移民だったからです。今更言うまでもありませんが、日本人が有する特色をこうした国にも改めて発揮することによって、これからの将来不安が付きまとう日本にとって、物理的にも精神的にも大きな絆がもたらせることと私は確信しています。

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

特別寄稿

当会特別顧問の石井様から、「呆け防止のためにブログを開始した」との連絡があり、ご本人のご了解を得て、いくつかの日記を下記のとおり転載いたします。

<https://blog.goo.ne.jp/iwatukiishiikoh>

徒然日記(2)：シニア海外協力隊顛末記(1)

当会特別顧問 石井 孝

タイに赴き JICA のシニアボランティアの仕事をした時、色々秘書のような形で、大変お世話になった女性から久しぶりのメールを貰った。

そこでふと思ったのであるが、シニア海外ボランティアの顛末について思い出すままに書きとどめてみる事にした。



1 応募のきっかけ

40年近いサラリーマン生活に一応のピリオドを打ち、何か心の中にポツカリ風穴が開いたような、そんな気分で居る時、家内がシニア海外ボランティアを紹介した新聞記事を見つけて来た。

これまでの人生を振りかえって見ると、海外に行って勉強するとか、仕事をするのが、一つの夢であった。若い頃には、フルブライトの留学生に憧れを感じた。就職してからも、海外関係の仕事に関心を寄せた時期もあったが、どう云う訳か海外に居を移して仕事をする機会に恵まれる事は無かった。我々が大学を卒業した頃は、アメリカ辺りに行くとなると、それは大変な事であったが、昨今は、海外旅行など日常茶飯事である。折角このような時代に生きるチャンスを与えられた以上、一度は海外に腰を据えて仕事してみなければと思っていた。

また、これまでを振り返ると、さすがに若い頃は、自分ながら良く働いたと云うか、仕事に夢中になれる環境に良く恵まれたと云う時期があった。素晴らしい上司に恵まれ鍛えられた。幾度も壁に突き当たり自分の能力の限界にさいなまれながら、何とかこれを克服し、小躍りすると云った快感を堪能した。このような貴重な体験が、生きる為の精神的エネルギーの源を創ってくれたのであろう。しかし、歳を重ねるにつけ、この水源も補給するより消費が急で、今にも底を尽きそうな気配である。体力的にも、また精神的にも幾分、柔軟性が残って居る間に、もう一度初心にかえり、一兵卒の身になって、残りの人生のために少しでもエネルギーを蓄えたい、そんな気持ちに駆られた。

そしていざ応募となると、不安も頭をよぎった。不慣れな土地で病にでも倒れたらどうしたものか。現地語は全く駄目で、英語も取り立てて得意と云う訳ではない、旅行ではなく仕事なのだから、細かいニュアンスなどが上手く伝わるであろうか。

また、すっかり身についてしまった怠け癖を克服出来るだろうか。こまかな事は秘書や部下に丸投げしてしまう、例の会社人間の悪い癖である。しかし、今度は、何から何まで、全て自分でやらなければならない。

多くの先達も居る事である。新聞記事を見つけた家内も背中を押す。魅力も十分である。ともかく応募することにした。

2 赴任先の第一印象

課せられた案件は、バンコク市郊外にある情報通信関係の職業高等専門学校、Nawamin Industrial and Community College において、急速に進展する技術革新にフォロー出来るよう、カリキュラムや教授方法について改善のアドバイスを行うことであった。

Nawamin Industrial and Community College

赴任を前に、この学校についてタイ国大使館に問い合わせしてみた。大使館では、本国にも問い合わせしてくれたようであったが、結局何も分からなかった。ぶっつけ本番の覚悟を決め着いてみると、そこは、バンコク市内ではあるがほとんど郊外と云った感じで、水田の中にコンクリート剥き出しの校舎が数棟建っていた。

開校は 1994 年で、国王プロジェクトとして教育省職業教育局の配下に、RAM 王朝 Nawamintrachutit 王の名前を冠した産業社会教育専門学校として設立された比較的新しい学校である。

情報通信関係の単科 College で、専攻は通信、電子、電気及びコンピュータの四つがある。各専攻の基礎教科は共通で、専門科目が若干異なるが、コース間に大差はあまり感じられない。教程は、3 年間の普通課程 (Certificate) と、その上に専攻課程 (Diploma) があるが、殆どの生徒は専攻課程を含む 5 年間を履修している。

授業は、午前、午後、補習の 3 コースが設定されている。補習コースは、旧来の職業学校の名残で、昼間仕事をしている人達のために設定された夜間コースであるが、最近出来た技術高専は、ほぼ全生徒が中卒の子供ばかりなので、この夜間コースの必要性については疑問がある。これがあるため、教官の勤務は朝 8 時から夜 8 時までとなり、極めて長時間に亘る労働負担を強いられているが、教官達は夜間手当てに魅力を感じているようでもある。

生徒の数は全部で 1,300 名程度、うち 4 割ぐらいが女性である。教官は 40 名ぐらいであるが、うち半数が教育省採用の正規教官で、他の半数は、現地採用の臨時教官である。現場はこの臨時教官で事実上支えられているが、この人達は移動が激しく、教育現場は安定した感じとは云い難い。

初出勤は通勤の道順のチェック方々、顔出しのつもりで学校に出向いた。ところが、学校の方は講堂に生徒を集め歓迎会をしつらえていた。何の準備もなく挨拶をさせられたのには大分戸惑ったが、生徒は皆良く躰られ、大変アットホームな雰囲気でも迎えてくれた。教官諸氏も皆好感の持てる人達である。その中で校長 Mangkorn 氏からは、教育に対する並々ならぬ情熱が感じ取れ、大変心強く感じられた。学校の第一印象は極めて好感が持てるものであった。

3 タイの職業高専－自営業のための訓練

タイにおける職業教育の発祥は、手に職をつけるための訓練に端を発したものと考えられる。元来が地域に根付いた教育訓練活動で、地域の職人達が地元の若者達の自立を助けるための訓練を行うとか、更に高度の技能を身に付けようとする意欲的な人達を熟

練工に育てると云ったような事がそもそもの発端である。地方のポリテクニカルカレッジと称する職業高専を訪ねると、地元の寄付による古い校舎が未だに残って居り、往時の面影をしのぶことが出来る。

今から約 20 年前からタイ政府は、当時好調であった経済状況を背景に職業教育の近代化と全国的普及を図るべく、産業社会職業高専と銘打った職業教育機関を 1 県 1 校設置の原則の基に大量開校して来た。筆者が赴任した学校もその一つである。しかしながら、その後における経済バブルの破綻と、加えて昨今の急激な技術の高度化、多様化、更にこれに伴う産業活動の変革は、比較的新しいこれら職業高専の環境条件に激変をもたらした。

職業高専は現在、凡そ以下のような課題を抱えている。

(1) ソフト化する技術への対応

職業高専の発祥経緯については先に触れたが、その主たる目的は自営業の育成と考えられる。技術系の場合で云うと、自動車やテレビの修理と云ったハードウェアの修理や工事技術を習得させることによって、自動車整備修理業であるとか、町の電気屋と云った職業への道を開く訳である。

ところが、昨今の技術革新により、自動車やテレビなどの装置や機器類は、LSI 化、パッケージ化が進み、マイクロコンピュータの普及でこれらの機能はソフトウェアコード化されている。このため、従来のハードウェアイメージの修理は考えにくくなって来ている。実際、修理業はメーカーに直結したディーラーに移行しているのが現実である。

このような技術の本質的トレンドを考えると、現行教程をかなり抜本的に変える必要がある。

(2) 就職の多様化

昨今の複雑で高度化した技術をふんだんに盛り込んだ装置や機器類は、広範な技術分野に関わりを持つため、その製造は勿論、その修理についても、資本力と組織力のある企業の手によらざるを得ない。

こう云った現実を考えると、情報工学や機械工学などの技術分野を専攻する高専卒業生は、自営と云うよりは企業への就職の道を開いてやる必要がある。このためには、学校、企業双方にとってメリットがある相互の連携システムを創り、相互理解と協調の道を模索する必要がある。

(3) 教官の問題

一時代前、テレビや自動車の修理方法をマスターするためには、簡単な基礎理論とある程度の応用技術を習得し、後は自己研鑽など経験を積みばよかった。教官にもこう云ったキャリアを持つ人が多かったようである。

しかしながら、LSI やマイクロコンピュータが詰まった、高度に複雑化した現在の技術を教えるには、この人達には荷が重いと云わざるを得ない。このため、いきおい、大学新卒者を採用するのであるが、彼等には現場経験と教育経験が不足しているため、中々満足出来る授業が出来ない。この辺のところをどう解決するか、これもまた差し迫った問題である。

(4) 生徒の問題

あちこち幾つかの職業高専を訪問して分かった事であるが、職業高専には、大まかに言って、理髪であるとか溶接などと云った比較的単純な技能研修を目的とした短期のコースと、情報通信のような本格的技術研修を目的にした長期コースの2種類がある。

短期コースの場合は、生徒自身が自分のスキルアップを図るなどと云った明確な目標を持った年配者が主体になっているため、教室の雰囲気は極めて意欲的である。

一方、本格的技術研修を目的とした長期コースの方は中卒の子供達主体である。彼等の大部分は、一般高校に進学出来なかった、所謂セカンドクラスの子供達である。このため、一部に良く出来る生徒もいるが、平均的に学力レベルは低い。どのようにしたら効果的な教育訓練が施せるか、頭を悩ますところである。放っておくと、全体のレベルがダウンするばかりである。

国全体の産業、技術のレベルアップを担う中堅層を、職業高専が育成しなければならぬとするなら、国は入学の仕組みから抜本的な対策を講ずる必要がある。

(5) 逼迫する予算

タイは経済危機から立ち直りつつあるが、財政は極めて逼迫している。現在進められている教育改革もこれに対する対応策の一環であって、職業高専の場合は、国から出来るだけ切り離し、資金を地方行政と地元からの寄付で賄わせようとしている。

これを実行するとなると、校長に政治的手腕が求められるが、このような能力を持つ人材は極めて限られている。(次号に続く)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

国際交流基金の動き

日本語パートナーズ派遣事業(派遣国：台湾)の募集

事務局

国際交流基金は日本語パートナーズ派遣事業として台湾 4 期(15 名)について募集しており、1 月 24 日(木)に締切予定です。海外と日本の架け橋になりたい方、[海外で日常生活・活動してみたい方\(旅行・出張ではなく\)](#)などぜひ奮ってご応募いただければ幸いです。
<https://jfac.jp/partners/apply/>

1. 趣旨

幅広い世代の人材をアジアの中等・高等教育機関へ派遣し、現地日本語教師と日本語学習者のパートナーとして、授業のアシスタントや会話の相手役といった活動をするとともに、教室内外での日本語・日本文化紹介活動等を行い、アジアの日本語教育を支援する。同時に、日本語パートナーズ自身も現地の言語や文化についての学びを深め、アジアと日本の架け橋となることを目標とする。

2. 活動内容(派遣期間は 2019 年 9 月中旬～2020 年 6 月下旬)

- (1)現地日本語教師のアシスタントとして授業をサポート
- (2)日本文化の紹介を通じて、派遣先の生徒や地域の人たちと交流
- (3)現地の言葉や文化を習得、等

3. 待遇

滞在費(所得税引後月額 14 万円程度)、往復航空券、国内交通費、住居等が提供される。

4. 応募要件

- (1)満 20 歳から満 69 歳で日本国籍を有する方
 - (2)日常英会話ができる方(英語で最低限の意思疎通が図れる程度)
 - (3)派遣前研修(約 1 か月間)に全日参加できる方
 - (4)心身ともに健康な方、等
- (注)[日本語を教えた経験がなくても良い](#)。特技のある方、[人生のキャリアを積んだ方](#)、アジアとの交流に熱意を持った方の応募が期待されている。

海外実践マネジメント

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(9) — 『NTT を巡るグローバル環境の変化』 日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、 そして NTT のグローバル化へ —

元 PLDT チーフオペレーティング・アドバイザー
元 NTT アメリカ社長
現 株式会社ハイホー CEO
鈴木 武人

5 : PLDT の買収

5.1 背景

Smart が順調にマーケットシェアを拡大する中、同国の企業で唯一 NYSE(ニューヨーク証券取引所)に上場している最大の通信会社 PLDT の放漫経営と、その子会社 Piltel の経営不振(SMS 機能が無い旧型 CDMA を展開して顧客を失った)が、同国の金融界だけでなく政界からも懸念があげられていました。



即ち、もし Piltel が倒産するような事があつたら、金融機関が影響を受け、結果、フィリピン経済全体に悪影響を及ぼすと危機感が持たれて居たのです。その安定化には資本注入と経営陣の交代が必要とされ、その状況でパンギリナン氏率いるサリム財閥の香港子会社 FPC と NTT の連合がその役割を担う様になったのは、1998 年 6 月にラモス大統領の後に驚きをもって登場した、エストラダ大統領との良い関係を築いて居たパンギリナン氏の政治的手腕によるものでしょう。

Smart にとってはその経営拡大の上で、PLDT が保有する全国に及ぶ 6 リンクのファイバー網等設備資産と全国の通信網へのアクセスが必要であり、また PLDT 網から Smart への着信料金から生じた売掛金(ターミネーション料金)を回収・清算する上からも PLDT 社の買収に意義が有りました。

プロジェクトの推進には NTT に増資を願わなくてはなりません。その為のストーリーは、NTT の国際通信事業に必須な海底線容量に関し、PLDT の 14%以上の株主となる事で NTT が PLDT のアフィリエイトと見做され、PLDT が海底線の取得原価で NTT へ売却できる事でした。PLDT は歴史のある国際通信事業者であり、世界中の多くの海底線プロジェクトに参加していました。

田嶋氏と共に FPC と一体でその企画を開始しました。実際の買収の方法としては Smart が PLDT を買収するのとは逆で、簡単に言えば、上場していない Smart の価値を公正評価し、その Smart を NYC に上場している PLDT が買収する事(その為の議決権は買収)とし、その為に必要な資金を FPC と NTT が資金を提供して PLDT が増資、その最大の株主となってコントロールを獲得し、結果的にマネジメントを入れ替えるプロセスとしました。

このディールの推進にあたり、パンギリナン氏がエストラーダ大統領を訪ねて最終確認をし、これを待って東京側でも正式にディールを開始する段取りに漕ぎつけました。ところが『パンギリナン氏のヘリが大統領の保養地 Tagaytay で墜落した』との、とんでもないニュースがもたらされました。数十分後には命に別状が無いとの連絡も入り、ディールを続行することとなりましたが、なんでも着陸に際してパイロットが自動操縦から手動に切り替えた際、突然、各パネルがクリスマスツリーの様に輝き始めて落下し、崖を滑り落ち、幸運にも小さな木に引っかかって止まって助かったとの事でした。それ以来、PLDTの所有する飛行機、ヘリはなるべく避けて商用飛行機を利用する事とし、またパンギリナン氏と小生は同じ飛行機には乗らない、またIRで世界を回る際にも異なったルートを利用する様に心掛ける事としました。

5.2 Piltel の件

ラモス大統領の通信政策は、海外からのあらゆる投資を呼込む為には固定電話のインフラを拡充する必要があり、その為に携帯通信等新規の免許の発行を行って海外通信会社からの投資を呼び込み、これに固定電話の設置義務を課すとされていました。従って、当初は既にサービスを行っていた PLDT グループには新規の設置義務は課されないと考えられていましたが、その後に公正競争の上から同様の義務がそのグループ携帯会社 Piltel にも課されました。PLDT 買収直前の調査(Due diligence)の一環として、某商社がターンキーベースで請け負ったという、Piltel に割当てられた地域(ミンダナオ南部)に展開された固定電話の施設の見学に行きました。現地は日本へのマグロの集散地として有名なジェネラル・サントスの20キロ程北側で、比国の最高峰アポ山と並ぶ高度2300mに及ぶマチュ・タム山の裾野に広がるドールのパイナップル畑の中に有りました。周囲に建物も人影も無く、数本の電柱と交換局が地平線をバックにポツネンと建っており、そんな所に需要が有る筈は有りません。携帯無線の施設についても基地局と思しき建物がジャングルにあり、そこに数局分の無線設備が倉庫の様に並べられ、アンテナも林立して技術的にセルラが構成出来る筈も無く、惨憺たるものでした。商社の責任者に経緯の説明を求めると、『設置にあたっての具体的な指示が無く、また契約上の工事期限がせまっていたので止むを得ず実施した。ただ、工事完了の確認は得ている』ということで、日本企業とは思えない責任を回避するだけの回答でした。Piltel はデジタル化を急いで、モトローラ社の CDMA の導入を図っていましたが、それが旧型 CDMA であり、GSM で既に一般化しつつあった SMS が使えないとの事から、急激に加入者を失いつつありました。結果、良いところが全く見られずに NTT へ報告した所、NTT 側から PLDT 買収案件の最大の懸念とされ、Piltel を切り離してから買収を進めるよう言われました。しかしながら、現地政府や金融界からの買収条件が、『Piltel の株主と債権者の権益を守って、フィリピン金融界の混乱を避ける事』となっており、板挟みの状態に陥りました。

この板挟み状態の解消はなかなかの難題でした。PLDT の買収に伴って新たに Smart の CEO となった Napoleon Nazareno 氏がコンサル会社を招き、ここからの斬新な知恵を頂く事となりました。

- ① Piltel 社員は技術者を中心に、拡大している Smart へ吸収し、更なる拡大を図り、また Piltel の運営経費を削る。
- ② Piltel のブランドと法人、営業体制を存続させて、株主・債権者を守りながら、これを Smart 配下の MVNO として事業継続する。
- ③ 結果として、世界でも最大規模の MVNO がいきなり誕生した事になります。

PLDT の買収にあたり、Smart の創立者の **Veal** 氏と **Fernando** 氏は Smart の株を売却して夫々独立のファンドを立ち上げました。

パンギリナン氏は PLDT の CEO に就任し、バスケットボールのプロチーム “Piltel” を創設、これを Piltel のプロモーション手段として活用、結構派手に活動して趣味と実益を兼ねました。米国から招聘したプロ選手の雇用には結構な経費がかかり、内部で若干の議論もありましたが、結構人気も出て、NTT もいつの間にか Piltel について神経質に拘らなくなってきました。

5.3 夢の衛星通信 イリジウムの件

傘下の Piltel はモトローラに旧型 CDMA を押し付けられて、どうにもならなくなっていました。これだけでなく、モトローラにはイリジウムでもとんでも無い目に逢わされていました。イリジウムは一時期、夢の衛星携帯電話として有名になり、PLDT は出資だけでなく、出資比率に応じた債務保証も引き受けて居ました。高度 780km に 66 個の衛星を投入する計画で 50 億ドルの設備投資となり、日本でも京セラ等が日本での事業を開始していましたが、衛星等インフラ投資の重荷と、大型で高額なハンドセットがネックとなりました。米国全体でも 5 万台程度の契約数に留まったことで、開始後 1 年弱の 1999 年 8 月に連邦倒産法第 11 条を申請して倒産しました。

この対応はカナダ人の **Don Rae** 氏がコンサルタントとして担当し、当然、PLDT にも債務保証分の負担が求められました。結果は、殆どの顧客が米軍であり、またこれが必須であったためにプロジェクト全体が米国政府向けのサービスに特化したイリジウム・サテライト社に引き継がれる事となり、思ったよりも小さな損害で済みました。(次号に続く)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/>

ブルーの誘惑

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智



日常目にするブルーは或は、ジーンズのブルーであったり、交通信号の緑がかかった青かもしれない。このブルーだが、この色の持つ様々なエピソードが興味をそそられる。

まず、アメリカで、デニムハンターという職業の人がこの世に存在するらしい。つまりは、掘り出し物の古着のジーンズを高値で売買するのだ。古着と言っても、百年以上の昔の、いわば骨董に近いものまで扱うわけで、「ビンテージ・ジーンズ」である。ジーンズとは、アメリカで、金鉱山や工場の労働者に愛された誠に丈夫なズボンである。従来のはすぐに破れるので、幌馬車の幌の布を使って藍色の染料に

つけたものである。「青い黄金」と言われ、高いものは1,600万円もする。このような高値の物は、あるいは未使用なままで、投資の対象にもなる。しばしば、JRの中で若い乗客が、わざわざ穴を空けた白っぽいものを穿いているのを見かけると思う。デニムハンターは、アメリカ中の鉱山の廃坑や工場跡を訪れ、頭にライトをつけ、口にはマスクをはめ、あちこち探しまわる。

深いブルーつまりインディゴブルーである藍の染料はもともと、植物の藍（たで）からとった。原料の蓼を育てるのに時間も手間もかかる。そこで、1880年にドイツで、合成染料が発明された。それからというもの、合成が主流となったが、ジーンズでもあくまで天然の染料を使う場合もあり、これを「ビンテージデニム」と呼ぶ場合もあるそうだ。

オランダのデルフトには2つのブルーがある。一つ目は、フェルメールブルー、そして、デルフトブルーである。画家フェルメールが使ったブルーでこれは実に高価だ。原料は、日本名で瑠璃（るり）という宝石。ラピスラズリとよばれ、その当時は金より高価だった。二つ目は、「デルフト焼」という陶器に着色されるが、おそらく、インディゴブルーだろう。「デルフト焼」はKLM航空のビジネスクラスのお土産でもらったタイルを今でも大切に保管している。フェルメールは、生涯38という寡作ということもあり、つとに昨今人気が出ている。本物を鑑賞したが、「真珠の首飾りの少女」で描かれた鮮やかなターバンは実に印象的である。

この高価なラピスラズリは、日本の金沢でも見られる。ラピスラズリを使ったコバルトブルーの壁は、前田家の成巽閣やお茶屋にも使われている。そのブルーは感動さえ覚える。このブルーをひときわ引き立たせているのは、茶屋街の東、西、主計の3つの廓にある。赤いべんがら（紅殻）格子である。インドのベンガル地方の紅料を使用していることから「べんがら」と呼ばれるようになった。どちらかという、真紅というよりエンジに近くて、芸者の舞に似つかわしい艶めかしさを漂わせている。

ブルーというと、憂鬱の代名詞のようだが、深みのあるインディゴブルーや目の覚めるようなフェルメールブルーを見るとおよそかけ離れた感動さえ起こさせる色彩である。
(完)

藤田嗣治のこと

日本ペンターネット社長 エッセイスト 田上 智

画家・藤田嗣治の企画展が、没後50年を記して上野の東京都美術館で開催されている。藤田嗣治のイメージは、パリ滞在の長い「おかっぱ頭の目立ちたがり屋」であった。すぐイメージとして浮かび上がるのが、「ロイド眼鏡にちょび髭、おかっぱ頭」である。自身高校時代・美術部に属し、油絵を描いていた身としては、その独特の色の出し方や絵の具の使い方に興味があった。

藤田は、明治19年（1886年）に東京・新宿に生まれた。両親とも名門で、父は嗣章、その嗣を1字もらい次男のため治（2番目の意）の一字が入っている。父親は、軍医、最終的にはトップの軍医総監まで昇りつめ、文豪・森鷗外の後任である。小学校のころから絵が好きで、医者にしたかった父の勧めには従わなかったが、比較的リベラルな家風のような感じだった。長じて東京美術学校に進むが、この時、森鷗外のアドバイスもあったようだ。

美術学校卒業後パリに修行の為、26歳で、「父親が30歳まで資金援助をする」という約束でパリに渡る。その後、日本とフランスを行き来したが、フランスでの高評価とは異なり、日本では長い間評価が低く、1969年の死後、ようやく勲一等瑞宝章を受けている。フランスではその11年前1957年に既に最高勲章レジオン・ドヌールを受けていた。

藤田の専売特許である「乳白色の肌」の秘密は、十分に解き明かされていない。藤田自身も決して他人には明かさなかった。藤田の技法は、決して絵の具を塗りたくることではなく薄く重ねる技法である。まず、キャンバスも市販でなく自分で制作していた点である。普通は2層であるが藤田のそれは3層である。詳しくは省くが、藤田嗣治の著者「近藤史人」によると「黄色と白の絵の具の微妙な配合具合」である。これを試行錯誤で最適なものを発見したようだ。

ついで、シンボルの「おかっぱ頭」については、床屋に行く金が無いときに、自分ではさみで簡単なおかっぱに仕上げた以来で、特に目立とうと思って始めたものではない。丁度ビートルズが、売れる前、自分たちで勝手に髪を伸ばしっぱなしにしていたのと同じである。但し、メガネは高価な『鼈甲』であった。

従軍画家として「アツ島玉砕」などを描くなど「戦争に協力した」ということで、戦争直後、画家としては一人責任をかぶされそうになったのがどうやら最終的にフランスに帰化した理由のようだが、最後はカトリックの洗礼を受け、5人目の婦人である日本人の「君代さん」と南仏ランスで静かな余生を送った。名前も日本名の嗣治をやめ、尊敬するレオナルド・ダヴィンチにあやかってレオナルド・フジタと改名した。結局、日本ではフランス人、フランスでは日本人とみなされ、終生『異邦人』であり続けた。

自分は、企画展には無いが新秋田県立美術館の壁画「秋田の行事」が好きだ。縦3.5メートル横20メートルの大作で、早筆・藤田が174時間の短期で仕上げた。パリのサロンで粹人に称賛される作品がほとんどだが、それを見て庶民が拝み涙を流させた「アツ島玉砕」や日本人の心のふるさとを思わせる「秋田の行事」など大衆に訴える作品も数多い。

時代的には両世界大戦、画家として、後期印象派、エコール・ド・パリ、シュールレアリズムを駆け抜け、酒も一滴もやらない不器用なお人よしだが、ある意味で時勢と妥協して生きた藤田は誠に興味深い謎に満ちた人物である。（完）

暁の寺（ワット・アルン）

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智

「アキノカゼ 木ノハガイルヨ 山のウエ」

日経新聞のごく最近の「文学周辺」に三島の「暁の寺」が取り上げられている。

さて、表題の句は天才・三島由紀夫が6歳の時に作った俳句である。すでに文豪の片鱗を見せているのではないか！三島が割腹自殺した時、ちょうど新入社員の研修中であったが、教官になだめられながらも勉強どころでなく詳細を知りたかった記憶がある。数多くの美文調の短編、長編をものにした作家だが、最も印象的だったのが「豊穰の海」の中の「暁の寺（ワット・アルン）」だった。タイ・バンコックの長期出張で数々の寺を巡ったが、七百あると言われるバンコックの寺の中で、最も印象に残ったのが、暁の寺（ワット・アルン）であった。高さ75メートルほどの塔の印象が美しい陶器で覆われていたこと、高所恐怖症の自分が、恐ろしく急な塔の階段を登ったことを覚えている。

三島由紀夫の同名の小説は「豊穰の海」という遺作ともいべき長編小説全4巻のうち第3巻に当たる。「豊穰の海」という奇妙なタイトルの海は地球上には無く、月面の海の一つであることがあとで分かった。三島由紀夫が、インド、タイなどの旅行を下敷きに書いているが、相当な事前、事後、仏教を中心に研究の跡がうかがえる。

「暁の寺」の小説の由来は、小説の主題ともなっている「輪廻転生」をビジュアルに具現化したものが、バンコクに聳え立つ「ワット・アルン」なのである。

作中に曰く、「かつてあれほど若い日の自分を悩ました唯識論、あの壮大な大伽藍のような大衆仏教の体系へと、本田（主人公の弁護士）は今や、バンコックの残した美しい愛らしい一縷の謎をたよりに、却ってらくらくと帰ってゆけるような心地がした。さるにても唯識は、一旦「我」と「魂」とを否定した仏教が、輪廻転生の「主体」をめぐる理論的困難を、もっとも周到な理論で切り抜けた、目くるめくばかりに高い知的宗教的建築物であった。その複雑無類の哲学的達成は、あたかもあのバンコックの暁の寺のように、夜明けの涼風と微光に充ちた幽玄な時間を以て、淡青の朝空の大空間を貫いていた」。

筋書きというものがあるとするれば、タイの幼い姫が「自分はある日本人の生まれ変わりだ」とする、その姫に年甲斐もなく恋をし、後刻、成長した姫を自分の別荘に招くというものだが、戦前戦後の時代の移り変わりを、巧みに登場人物を通して語らせている。

夫婦間に子のない、莫大な成功報酬を得て経済的には全く不自由のない弁護士が、唯一生きがいとして残されたのが、この姫の輪廻転生の生き証人としての確証を得たいという欲求のようである。三島はインド政府からの招待旅行で、帰途バンコックにも立ち寄っているが、強く衝撃を受けたのが、聖地インド・ベネレスで、そこで「究極のものを見た」（新潮文庫・森川達也解説）のである。

旅を旅で終わらせるのではなく、それを小説のモチーフに転化させるのが、プロの物書きの仕業である。三島はそれをこの小説で見事に証明して見せた。（完）

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/>

スペイン・モロッコ俳句紀行(4)

元 JICA シニアボランティア

現千葉県 JICA シニアボランティアの会
北垣 勝之

ミナレットに巣作り^{たか} 崇しコウノトリ

ひつじ丘^{りょくや} 緑野 スイセン春日和

草原にメイメイ羊可愛いね

長旅の疲れ癒さる小動物

風そよぐユーカリ林の鉄路往く

車窓に映る自然の景色を眺めながら旅するのは楽しい。遠くの雪山、近くの沼沢、そして原野に草食む牛馬や羊の群れ。モロッコでは羊が多くなるが、アルガンの樹木に背伸びして葉を食むヤギもいる。またスペインではウサギを見かけることもある。モスクの尖塔の上に、おやっ鶴がいるぞと思ったらコウノトリ。脚と嘴が赤くヨーロッパには多い種類だ。小枝や枯草で立派な巣を築いている。子どもを運んでくる鳥として大事にされている。なだらかな丘に羊が移動している。今春生まれたばかりの子羊もいる。顔立ち、しぐさから愛犬を思い出す。できたら一匹連れて帰りたくなる。早春の野を水仙の花があちこちに咲き、モロッコを南下するほど原色の花々を見る機会が多くなる。鉄道線路沿いに何故かユーカリの林が広がる。育ちが早く木材として利用価値が高いからであろう。植林の手入れも行き届いている。猛禽もいれば日本でも見かける小鳥もいる。動く動植物園に旅の疲れが癒される。

1・2等モロッコ鉄道差別^{うむ} 有無

今回初めてモロッコ国鉄(ONCF)の1等車に乗る。フェズ・カサブランカ間と、その翌日のカサブランカ・マラケシュ間の移動を列車にした。フェズ中央駅の窓口で私が2等切符を買おうとすると、若い女性駅員が一等を勧める。外国から来た観光客なら1等が当然と言わんばかりである。前者の区間なら混み合うこともなかろうと渋っていると、「じゃあ、貴方は2等でマダムは1等にしたら」と笑いながら提案する。「それはグッドアイデア、だけど私が1等でマダムは2等だ。日本では私がキングで家内はサーバントなんだから」と付け加える。こんなやり取りをして乗り込んだ1等車は6人のコンパートメントで仕切られている。カサブランカまでは我々二人だけで1室を占有することができ、確かに優雅な1等車の旅であった。金曜日の移動でやや空いていたきらいがある。

その翌日、土曜日のマラケシュ行きは乗客が多く、コンパートメントは全て満席。家内との会話さえ差し控え気味に過ごす。おまけにトイレの水は出ず、紙の備え付けもな



い。トイレは車両の端っこ、デッキに直通で風通しが好過ぎる。トイレのドアは鍵が壊れているらしく、列車が揺れるたびに開く。一度、小用に出掛けドアを開けると、ケツ丸出しの女性が内側から慌てて閉めようと把手にしがみ付いてきた。吹き曝しのデッキでは車両の轟音でノックも聞こえない。いやはや失礼仕り候。便器は垂れ流し式で、線路にそのままストンと落ちる。終戦前後の懐かしき日本の鉄道を彷彿とさせるものがあった。

1等と2等車の違いとは何か。勿論、値段が違う。運賃は距離制で1等は凡そ2等の5割増しである。日本のグリーン車と普通車の差ほどもない。また座席の質もそれほど差がない。決定的な違いは、1等車は指定席になっているので混雑していても必ず座れる。だが2等車は全て自由席であり、時と場合によっては大きな荷物を持った乗客が車内に充満しごった返す。3年前メクネス・カサブランカ間の移動で、たまたまイスラム行事と重なり大混雑に遭遇したことがある。私は何とか座れたが、3時間以上も立づくめの乗客が沢山いた。

カサブランカ駅のホームで列車待ちしている間、一人の爺様と会話することになった。年齢は私より少し若い程度、向いの線路に止まっている回送列車の機関車を指さし、モロッコ国鉄は日本の技術に負っていると宣う。そこには‘Hitachi’の刻印が付いていた。いつ輸入されたものか分からないが動力車は日本製であった。彼は2年前にONCFを定年退職した機関保守のエンジニアだった。誇らしそうに当時の身分証明書を取り出して私に見せてくれた。時々駅に来ては現役の後輩と言葉を交わすのが日課になっているようだ。それにしても客車のメンテナンスまでは手が回らないのがモロッコの実情らしい。

カサボヤジャー雨に^たた^たらる傘ブラか 金曜日商都忙しく人往来



カサブランカでは唯一雨に見舞われ、カサボヤジャー駅からトラムに乗り、港に近いホテルまで傘を差して歩く。スコールの一番酷い降りに出くわしたが、金曜礼拝にもかかわらず商都は賑わう。カサブランカのシンボルはハッサン2世モスク、モロッコ最大のモスクで尖塔の高さは200m、規模の大なるは勿論、施設の豪華さはモロッコのみならずイスラム圏で隋一と称される。所蔵する財宝の数々に魅せられ、ムスリムだけでなく世界中から多くの人を訪れる。モロッコ中のモスクの総本山と位置付けられている。その雄姿を写真に収める。それで十分、あくまで信仰の象徴に過ぎない。ベン・ユーセフがフランスから独立(1956)を勝ち取り国王(ムハンマド5世)となるが、その後を継いだハッサン2世が建立したモスクである。

港町ひばり演歌で街歩き リックスカフェ名画を偲ぶカサブラン

雨の翌日は快晴、朝方にカサブランカのメディナを散策する。ナイス・スポット2カ所を巡る。リックス・カフェは映画「カサブランカ」に因み2004年に建てられたレストラン、いかにも西欧人好みの瀟洒な建物である。もう一つはラ・スカラ、人気のカフェだけあって朝食を目当てに観光客が集まる。スカラとは「見張り台」の意、カフェの入

口付近は錆びた砲台が残る要塞の一部になっている。これらの飲食場所はナイトクラブとしてカサブランカの夜をも演出する。でも港沿いのロマンチックなヤシ並木道を散歩していると、ついつい「港町十三番地」を口ずさみたくなる。「長い旅路の航海終えて 船が港に泊まる夜 海の苦労をグラスの酒に みんな忘れるマドロス酒場 あ～港町十三番地」。石本美由起は恐らく横浜辺りを想い浮かべながら作詞したのであろうが、ここカサブランカでも十分通じる。

マラケシュへ四季それぞれの山模様 アーモンドの花咲く彼方雪の山

東風 吹かば 梅香 寄せとアーモンド 花

マラケシュに近づくにつれオート・アトラスの冠雪した山々が見える。枯れ野の丘に青々とした草原も、黄や白の小花に混じり所々に淡いピンクのアーモンドまで春を奏でる。アーモンドの花は匂いこそないが梅花を連想させる。中東から地中海沿岸にかけて春の到来を告げる花である。なんとなく自然が華やぎ始める。そしてアンズやリンゴの花が咲き、それらは夏から秋にかけて成熟し、果実やナッツ類となってモロッコ国民に益をもたらす。紀元前からの先住民たるベルベル人は、このような自然の恵みを得てサバイバルしてきたのであろう。

ジャメールフナ話が弾む旧知かな 懐かしき観光客が来ない路地

マラケシュに来たら、何をさて置いてもジャマ・エル・フナ広場に足を運ぼう。思い描いていた通り 3 年前と同じ活気が待っていた。だが私の行き先は、広場の東側の狭い路地を少し入った現地人の住区である。電気屋、タジンやクスクスの食い物屋、その他雑貨屋が続く。その一つ一つが変わらぬ表情をしている。その中で情報機器修理屋の店先で足を止める。店内には端末と向き合っている男が一人、「サラーマリコム、私を覚えているか」と口上を切り出す。相手も顔を上げ私を見つめる。すると一気に話が迸り出る。「あの時、オマエは日本の皇族の話をしていたな」と私が言えば、「アナタは向いのホテルに泊まっていたね」と応える。傍らにいる家内を紹介し、「オマエ歳いくつだったっけ」、「今、46 歳」、「それじゃわが家の息子と同じだ。オマエはモロッコにいるオレの息子だな」と笑い合う。私も彼もお互い元気で再会できたことを祝福しながら、「仕事の邪魔をしてごめんよ、また逢おうな」とハグして別れる。10 分位の挨拶だったが、1 万 km も離れた所の隣人と会えたことが信じられないほど不思議な瞬間であった。（次号に続く）



<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/>

お知らせ

第 38 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

ICT 海外ボランティア会(ICTOV)による第 38 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

1. 日時：2019 年 2 月 15 日(金) 15 時～17 時
2. 場所：(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室
東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
JR 五反田駅から徒歩約 5 分(下図のとおり)
<http://www.jtec.or.jp/about/access.html>
3. 講師：三宅 功様(NTT データ先端技術株式会社 前社長・現相談役、元 N T T 情報流通基盤総合研究所所長)
4. 演題：「世界におけるサイバー攻撃の動向」
5. 参加費：無料(会員制ではなく、どなたでも参加できます)
6. 申込方法：参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及び談話会参加希望の旨をご連絡ください。なお、Web TV 会議室への参加ご希望の方はその旨ご記載ください。
<連絡先> ICTOV 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

☆中国・ロシアのサイバー攻撃、それに対応するアメリカの動きなどについて、初心者にもわかりやすく、随時質問できる雰囲気の中で、気軽に楽しく談話しながら、学び、考える機会です。乞うご期待！

(注) Web TV 会議室への参加方法は次のとおりです。

- ① 次のサイトで初回のみ、ミーティング用 Zoom クライアント(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。なお、Zoom はクラウドベースの Web TV 会議室システムであり、パソコン(カメラ付がよい)、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。

<https://zoom.us/download>

- ② Web TV 会議室の案内が海外情報談話会開始 5 分前までにメールで届くので、メールで指定された Web TV 会議室に入室する。



編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 84 号を発行することができました。今回は新たに「“第二の故郷”アルゼンチンへの想い」のご寄稿などもあり、誠にありがとうございました。

当会は 2008 年発足後、今年度で 10 周年に当たっておりますが、これも皆様のおかげと感謝しております。今年もコツコツと続けていきたいと思っておりますので、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)

会報担当： 村上 勝臣(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)

ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)